

127
470
1

氣比
鷓鴣
籠谷
杖
二



029
470
/

愛知女專
第 11812 號
書 圖

大南
十

氣比

刀環調

雁ハシ方南一人を北へ首途の心を送
登トは是ハ津の國柿壺れ國瑞よ
くは扱毛秋友魯隱と尸人鐵箭の
國氣比乃明非又ま清尸されははと
街又ゆきくくと馬れ饑をし仕
ちやとねの月乃族か
秋くくわされてもふ逢秋の雲と

氣比

ハ
シ
ノ

月さ夜ほのひを
 名月入山國日和見は
 くらき浦さるの
 安れ萩もき露の
 朝うし野ささる秋の
 鞍みまき松藪たを
 去くまのまふた
 たまの

ひろさか

名月やあはさるは江乃りき

一草

十九の晦夜をばういて
 名人乃さるくを
 といひ野水舎者定離の
 たもくや藤さるら
 あきとせは誰もの
 うのよし清原

流しきりて種屋つくりたり葉の上
くのまゝに菊つゝ入らぬぢぢぢ

ゆきくも雪うらう葉一打りみら 一学

山中のいさふゆい冷し海ちうろちひひとゆくあえ
すししうらうつた大聖ちの昇脚しとてい
ほうちきしとあしうらうて日乃くわんうあやつち
つた松のしうらうをゆくに海のいさぢりき
まあしうらうのまもすま海

荒のゆきくも雪うらう葉のせ

大いしーのハ水とてあおよもあひて山なり

あうゆみきしひの白もて

茶葉の眼し目もまた山家か ハ水

ちひゆりなたり荒のゆきくも雪うらう葉のせ 多量

あまきしうらうもつしきまらまぢや 一学

や海しうらうのゆきくも雪うらう葉

しー葉のてしうらうゆきくも雪うらう葉のせ
いしうゆきくも雪うらう葉のせしうらうゆきくも雪うらう葉のせ
あまきしうらうもつしきまらまぢや
うみもいしうらうゆきくも雪うらう葉のせ
あまきしうらうもつしきまらまぢや

たゞうつくしき中しつらうなる花びらもあまを
今もあまのいぢもひびいてすむるはよき
都のそとすねひて再訪する小音ももつて
はらきりてはさきもさきもえいもつらう
ほららら

つらうつらう

秋山 梅のつらうつらう

氣比よめさし

あつたにちちとて庭の梅のさか

敦賀をひとつのりかて氣比の社地と角菘の御神
の名さねつものさねつは御代うのうさめさた
わもねつくちらうて名御勇士のわさき
あつたのりて足さくもあつたもさきさ
まもさつてい方の信よまらねつはあつたもさ
さひらたはすあつたもさつたもさつたもさ
つらうつらうつらうつらうつらうつらうつらう
あつたもさつたもさつたもさつたもさつたも
はつたもさつたもさつたもさつたもさつたも
つらうつらうつらうつらうつらうつらうつらう

みらぬきやとまきつてけりて
いづりきりてきりて道者乃
ゆきりてきりてわたりて
のあけけりてきりて
ゆきりてきりて
とてきりてきりて

。 雪の心もあきぬ
不 僅うおのりてきりて
し二
みろ

雪の心もあきぬ
申乃 嶽の心もあきぬ
さふ乃 あきぬ
目乃 雪をきりて
かき川やなみの小石を拾ひ上
る雪をきりて
雪の心もあきぬ
海飯つむき
四五年の松も雪を隔つむ
雪の心もあきぬ

二
二
二
二
二
二
二
二
二
二

山雀の房より細き月出さ

二

かきくくくくくく 秋

彦

行宮乃秋冷き土是や

二

暁をけりてくくくく

彦

花びらき木のまげふも咲く

二

菊山は群一 家々の富

彦

尊世菜乃ゆきまるとる得まよ

全

早外おくく人まの日の橋香

二

あは秋花門の小橋をけりて

彦

雀く啼くあはれ秋の宴

二

くくける呼の囀もくくく知く

彦

被れくくくくくくくあま

二

秋自ふきよれおちの夕月秋

彦

土籠のつらてくくく 陣

二

梨子ひくく城めくくれのあま

彦

つくろの神の當化くやとく

二

和くくくく啼く面をけりて降

彦

袋くくくくく 土乃すくく

二

みふ人のくくくくくくく

彦

布子の袖にたぐくくく

二

いづれもきく冬もあけ
夏の上より
けつは阿佛の白や
芥福とも
二
二

岳輅論 三千考乙二
俳諧 日風景不殊正
自有山河之異
代山を
二

をばりい
最良
あり社
二見の月
高
わす
二

西辰
朱橋豊
士朝

宣政十年丙午九月

善隱字

大阪書林

丹波屋信壽

